

# NEWS LETTER

VOL. 23  
JAN 2023

HRC-GH

## 2023 年を飛躍の年としよう!

清々しい新年をお迎えのことと存じます。グローバルヘルス人材戦略センターも 6 回目の初春を迎え、ますます、日本の有為な人材を国際機関に送り出すお手伝いを活性化しようとスタッフ一同気を引き締めているところです。

昨年は、ポストコロナの新しい活動形態として対面とオンラインを組み合わせた「ハイブリッド形式」の研修会を試行し、大きな手応えを得ました。対面で直接、現職の国連機関採用担当者からアドバイスを受けたり、志を同じくする人と会話したりオンラインでは得られなかった経験をしていただきました。一方で、オンラインでは、遠方においても時間的・金銭的負担を少なくしながら知識やスキルを学べるという良さがあるので、両者の良さを良いとこどりするようなハイブリッド形式のイベントを充実させてゆきたいと考えています。同時に、グローバルヘルスの中での日本を考えると、今年は G7 の主催国であるばかりでなく、我が国の



お家芸とも言える UHC と結核に関する国連総会特別会が 9 月に開催され、ポストコロナのグローバルヘルスの道筋がより明らかになるのではないかと思います。そのど真ん中にいるのが我が国。構想力、政治力、人材で世界に貢献し、私たちがより健康に、そして、安全になるよう力を合わせてまいりましょう。

グローバルヘルス人材戦略センター ディレクター 中谷 比呂樹

## Go UN / Global – The Global Health Career Development Workshop for Japanese Professionals

国連・国際機関へ行くー日本人専門家のためのグローバルヘルス・キャリア・ディベロップメント・ワークショップ



写真：ワークショップの様子

2022 年 12 月 10 日（土）、グローバルヘルス人材戦略センター主催、WHO 西太平洋事務局（WPRO）後援により、標記ワークショップが開催されました。過去 2 年間は新型コロナウイルス感染症の蔓延により完全オンラインで開催しましたが、今回は感染症対策に十分留意した上で、WPRO から講師陣を迎え、会場参加とオンライン参加の合計 107 人の参加がありました。

当日は、地引英理子グローバルヘルス人材戦略センター上級研究員による司会の下、午前中は中谷比呂樹センター長による開会のご挨拶、ジェ

フリー・コブザ WPRO 管理・財務部長による WHO 概要、ラニア・カーボ WPRO 人事部長による WHO 採用プロセス、そして、ヤング・アイ・リー WPRO 人事担当官による履歴書の書き方の講義がありました。

午後はリー人事担当官より筆記試験、カーボ人事部長よりコンピテンシー・ベースド・インタビュー（CBI）についてご説明頂く過程で、模擬筆記試験の実施や講師から参加者への質問の投げかけ等、例年以上に双方向のやりとりを重視した内容となりました。また、会場参加者はもちろんのこと、オンライン参加者が積極的に参加できるように、WPRO の人事担当官 3 名もマニラから加わり、オンライン上でグループに分かれ模擬面談を行いました。そして、最後に、たっぷり 1 時間、質疑応答の時間を設け、参加者はそれぞれが抱く疑問を積極的に投げかけていました。

2016 年の日本開催から今年で 7 回目を迎えた本ワークショップ。今年は WPRO から講師を迎え、久しぶりのハイブリッド開催となりましたが、オンライン参加のニーズも高いために、彼らも積極的に参加できるように随所で工夫を凝らしました。このように、その時々状況や受験生のニーズに応じて最適な内容を検討しつつ、引き続き本ワークショップを開催して参ります。

## WHO 西太平洋事務局職員による個別進路相談会

2022 年 12 月 11 日（日）、WHO 西太平洋事務局（WPRO）職員による個別進路相談会を実施しました。事前に、保健関連の国際機関での勤務を希望し、現在就職活動をしている日本人 18 人を選別し、コブザ管理・財務部長、カーボ人事部長、リー人事担当官に各 6 人ずつ、30 分間進路相談に応じて頂きました。

当日は、京都・大阪の遠方や海外（オンライン）から、医師、看護職、

非医療専門家、学生と幅広い参加がありました。また、相談内容も自分が国際機関に向いているかどうか、海外経験がない場合、国際機関勤務はあきらめないといけないのか、自分に合ったグレードはどのレベルか等千差万別で、講師陣はそれぞれの相談者に応じて丁寧にアドバイスをしていました。

過去にはこうした現役国際機関勤務者による個別進路相談を受けられた方の中から国際機関に合格された方も複数人出ています。ぜひ今回のアドバイスを活かし、将来の国際機関勤務につなげてほしいと願っています。

## 第7回国際臨床医学会学術集会オープン・フォーラム 「グローバルキャリアの作り方：北海道から世界へ」

2022年11月3日（木・祝）、グローバルヘルス人材戦略センター主催で標記オープン・フォーラムが北海道大学と国立国際医療研究センターをオンラインで結んで開催されました。

グローバルヘルスはポスト・コロナ時代にふさわしい活動と体制が模索され、大きな変動の時代を迎えています。高齢化や低経済成長の中でもUHCを維持してきた日本は課題先進国として世界に貢献するとともに、海外の先進事例から学び、国民を守り、経済を強化し、世界に貢献する国内保健と国際保健の連続性強化が求められています。それを担うのはヒト。そのような活動をされている北海道ゆかりの女性講師から将来のキャリアを考えるヒントを頂きました。

当日は、中谷比呂樹グローバルヘルス人材戦略センター長を座長に、山本尚子 WHO 事務局長補より「公的セクターにおける国際キャリア作

り」と題して、多岐にわたる健康課題解決のために、私たちは何を、誰と、何処でどのように行うのか、国際キャリアがその一つの答えとしてご自身のご経験を交えてお話頂きました。また、坂元晴香東京女子医科大学グローバルヘルス部門准教授からは「アカデミアでの国際キャリア作り」と題して、アカデミアからのグローバルヘルスへの関り方についてお話頂きました。さらに、本田裕子厚生労働省国際課主査からは「産官学の国際協力の仕組み作り」と題して、ご自身の官民連携のご経験に基づき国際保健協力についてお話頂きました。そして、最後にグローバルヘルス人材戦略センターの地引英理子上級研究員が「キャリア相談事例から見えてきたキャリア構築へのヒント」と題して、キャリア相談事例や調査研究から見えてきた日本人候補者の特徴・課題、国際機関に受かりやすい人と受かりにくい人の違い等をお伝えしました。

参加者からは、最近の若い日本人の内向き志向への対処方法や海外勤務経験の積み方などについて積極的にご質問を頂き、グローバルなキャリアに対する関心の高さが覗えました。

## グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際ネックになることが、ロールモデルになるような人物が身近にいなかったのがキャリアパスを具体的にイメージできないということです。そこで当センターでは世界の様々な地域で、また、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々にキャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上に公開させて頂いています。

第12回は、世界保健機関（WHO）南東アジア地域事務所 テクニカルオフィサーの谷水 亜衣氏です。

### 第12回

インタビュアー 清水真理子



**世界保健機関（WHO）南東アジア地域事務所  
テクニカルオフィサー**  
谷水 亜衣 [たにみず あい]

1987年兵庫県生まれ。2010年カナダ・ヨーク大学卒業、カナダ正看護師国家試験合格、オンタリオ州正看護師資格取得。2010年～2015年カナダ・トロントのリハビリテーション病院、がんセンターで臨床看護師兼リサーチアシスタント。2015年～2016年クウェート国立がんセンター向上プロジェクトにカナダのがんセンターから看護教育専門員として派遣。2016年～2018年カタール国立がんセンター向上プロジェクトにカナダのがんセンターから臨床スペシャリストとして派遣。2018年～2020年WHOバングラデシュ国事務所（country office）（JPO）。2020年～現在、WHO南東アジア地域事務所（regional office）テクニカルオフィサー。

#### —カナダでスポーツ科学、看護学を学ぶ

高校時代からスポーツが大好きでスポーツ科学、スポーツ心理学に興味をもつと同時に将来は看護師になりたいと思っていました。

カナダのヨーク大学でスポーツ科学キネシオロジーを専攻、カナダではセカンドディグリーで看護師になる人が多いことを聞き、2010年に看護学科卒業、国家試験に合格しました。当時、新人研修期間の給与はカナダ政府が負担していました。しかし私はビザ切り替えに6カ月かかりその制度を使わず、希望していた病院は新人の私に給与は払えないということで入職できず、ようやくリハビリテーションの病院に臨床看護師としての職が見つかりました。ここで臨床をしながらがんセンターで看護学の教授のリサーチアシスタントになり、看護師目線でのケアの在り方、がん患者を再発の恐怖から守るケア、チーム医療内の

看護師の役割などのリサーチを手伝いました。

#### —看護は臨床だけではなく、看護目線で多くの力になれる

日々の活動が認められたのか、希望していたカナダトップクラスののがんセンターに転職できました。院内にはいろいろな看護師がいるので、自ら声をかけて話を聞き、看護師として何ができるのか、将来のキャリアアップについて考えました。1年目から学会に参加して、国内の地域による差異を学び、3年目にはパナマで開催された国際がん看護協会主催の国際学会で、私が所属するがんセンターのプロジェクトについて発表しました。これは病院のサポートがあって叶い、ここで世界各国の看護師と出会い、将来は国際的な仕事をしてみたいと思うようになりました。

#### —クウェートの国立がんセンターに出向、驚くことばかりで得難い経験

系列のクウェート国立がんセンターの向上プロジェクトで看護師が必要と聞き、手を挙げました。自分の知らない国の看護を経験したいという気持ちから参加しましたが、クウェートでは驚くことばかりでした。一言で言うと文化の違い、男女がはっきり分けられていて、看護師のほとんどがクウェート人ではない、90%がインド、フィリピン、スリランカ、バングラ、ヨルダンからの出稼ぎでした。医療センターは20年前の医療、教科書でみた光景でチーム医療という考えは浸透していませんでした。

（続きは [https://hrc-gh.ncgm.go.jp/job-global/role\\_model/](https://hrc-gh.ncgm.go.jp/job-global/role_model/) でお読みいただけます。）

### ■人材登録のお願い

12月22日現在、770名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになっていきます。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲

載しています。未登録の方は登録されますようお願いいたします。

<https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>

